

2015 活動記録 No6

活動日時	2015年7月24日 午前10時半～午後2時
場所	神奈川県大磯町 澤田美喜記念館
出席者	17名（会員12名、7期生見学者 5名）
活動内容	<p>朝から強烈な陽射しの照りつける中、大磯駅前の木立の中にあるエリザベスサンダース・ホームの門を入る。右手のホームへの道と分かれ、左手の急な階段を息を切らせながら上がると鐘楼の先に新装なった記念館があった。木立を通して太平洋が望める。海の先は米国。混血の孤児たちはこの海を見ながら涙したに相違ない。</p> <p>澤田美喜が収集した「隠れキリシタン」に関わる遺物の保存・展示と太平洋戦争後、親に見捨てられ、住む家もない混血孤児たちを救うためのホームを建設し、その生涯を混血孤児の保育・教育に捧げた澤田美喜の記念館である。隠れキリシタン関連の展示説明を堀井氏から頂き、その後礼拝堂にて、西田さんから澤田美喜の生涯とホーム運営についてお話頂いた。</p> <p>美喜は三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の孫娘として生まれ、岩崎家の長女として裕福な生活、最高級の教育を受けて育った。外交官でクリスチャンだった沢田廉三と結婚し4人の子の母となった。夫の赴任先の海外各地でその教養と語学力、人柄の良さを存分に発揮し、華やかな社交を繰り広げて夫を支える一方、キリスト教の洗礼を受け、教会活動に熱心に取り組んだ。敗戦後の日本で汽車の網棚から落ちてきた風呂敷包みの中の皮膚の黒い嬰兒を発見した瞬間に、親に捨てられ住む家もなく、差別にあえぐ混血児を救い育てる事が自分の天命と悟る。</p>  <p>私財を投げ打ち、家族とも離れ、今迄の何一つ不自由のない生活を捨てて エリザベス・サンダースホームを創設、亡くなるまでに2000人近くの混血孤児を育て上げた。混血孤児救済を白眼視する社会・人々と戦い、ホーム運営の寄付金集めに海外を奔走し、頭を下げ続けた。立教大学の創始者ポール・ラッシュは孤児たちの洗礼親を務めるなどして美喜を支え、ジョセフィン・ベーカー、マリー・ローランサン、グレース・ケリー等も良き理解者、協力者だった。ホームの子ども達からは「ママちゃま」と慕われる一方で、犯罪に手を染めてしまった子どもたちの保護責任など苦勞の連続だったが、「信仰半分、意地半分」、78歳で亡くなるまで走り続けた。篤い信仰心に基づいていたとは言え、何と強い意志を持った人だったのだろう！</p> <p>・現在は混血孤児の為の施設ではなく、一般の養護施設として大磯地区の児童相談所から依頼された子どもたち81名を受け入れており、美喜とは違った悩みを多く抱えているとの事である。</p> <p>参考図書:黒い肌と白い心（日本経済新聞社、1963年）、GHQと戦った女（新潮社、2015年）他 次回予定： 2015年9月3日午後2時より 於：リビエラ Cafe 「澤田美喜について」</p>

